

# 金沢市戸水C遺跡発掘調査概報

金沢港泊地造成事業関係  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1979・3

石川県教育委員会

## 例　　言

1 本書は運輸省第一港湾建設局の委託により昭和53年5月1日～昭和54年3月31日にかけて実施した金沢港泊地造成事業にかかる発掘調査の概要報告書である。なお調査費用は、第一港湾建設局が負担した。

### 2 調査指導員

高 堀 勝 喜	石川考古学研究会々長
荒 木 繁 行	" 副会長
橋 本 澄 夫	" 幹事

### 調査員

田 島 明 人	県教委文化財保護課主事
平 田 天 秋	" "
端 野 英 子	" "

3 本書の編集・執筆は調査員の討議のうえ平田があたった。



## I 調査にいたるまでの経過

昭和50年度に実施した調査以降、冬期の波浪と港内を航行する船泊の航波により50年度調査区域とそれに後続する未調査区域の自然崩壊の危険が生じてきた。その為、第一港湾建設局と文化財保護課と協議の結果、未調査区域の西側と北側部分について崩壊の防止のため防護柵を新設することとした。がしかし、その防護柵も、52年度の冬期間の波浪により、一部では破損し、未調査区域の崩壊の危険が再度生じるに及んだ（北陸中日新聞昭53.3.10）。その為、53年3月から、数回の協議を双方で重ね、昭和50年度に後続する未調査区域の発掘調査を昭和54年度事業として実施することとなったものである。なお、金沢港泊地造成関係事業に関連した発掘調査は昭和47年、50年と本年度との三次にわたる。

## II 調査結果の概略

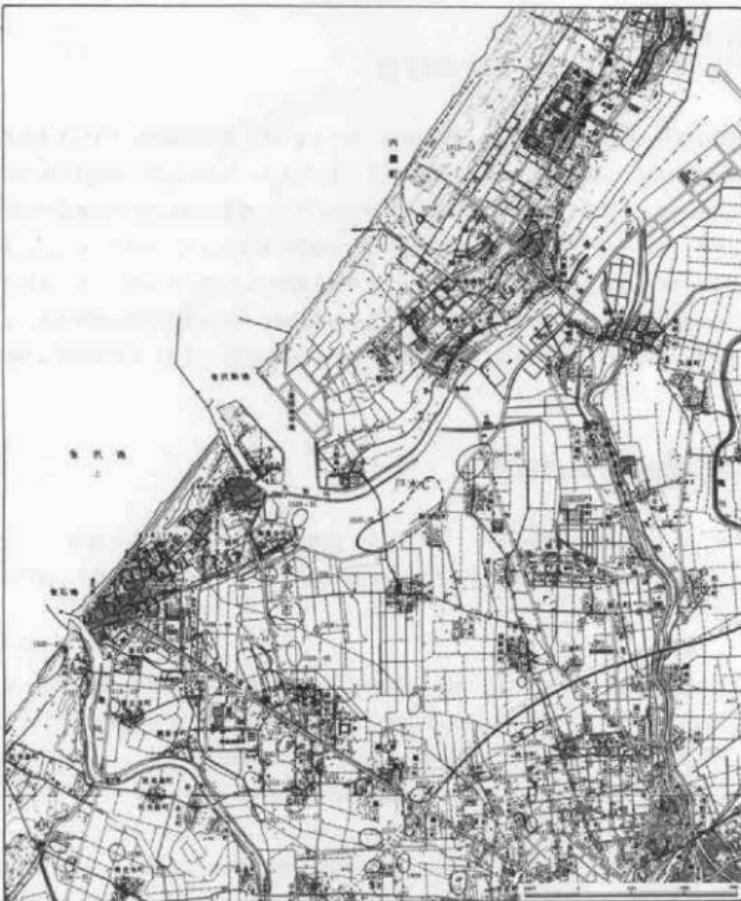
昭和50年度に実施した部分に統いて、それぞれの東側部分と南側部分の調査を実施した。詳細については次年度以降の調査後に刊行される正式報告書に譲るとして、検出した遺構、遺物の概略を記すこととする。

### 1 遺 構

検出した遺構には古墳時代前期の溝跡、平安時代から中世期にかけての無数に近い溝跡、中世期に属する（14世紀）大溝跡、平安時代に属する井戸跡（04井戸）、これは素掘りのものである。又、長方形、方形に近い竪穴状の遺構がある。これについては遺物も細片のみの出土で性格不明のものである。4基を検出しているが規模はおおむね250cm×350cmのものであり平安時代以降に属するものと考えている。又、性格不明のピット、土壙が非常に多く検出されている。これらも平安時代以降に属するものと考えられる。掘立柱建物は昭和50年度の分を入れると4棟を数えるが、楚板が遺存している柱穴も存在するのであと2棟以上は増えるものと推定される。それらの掘立柱建物4棟分について、若干の概略を記して、本年度の検出遺構の概略とする。

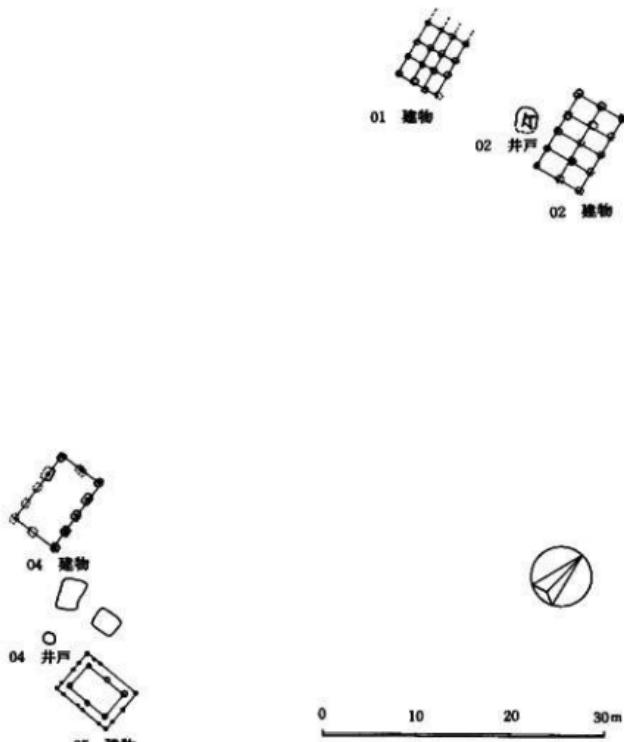
#### A) 01 建 物

桁行3間以上、乗行3間の南北棟建物と推定される。各柱穴には、柱根、楚板、楚石等の遺存しているものはない。柱間寸法は柱痕跡より復元すると南北側柱列では、210cm（7尺）等間であり東西側柱列では、150cm（5尺）等間で柱筋にすべて柱がたつ純柱の倉庫様の建物となる。据付掘方は不整形なものが多いが、おおむね60×90cmの方形に復元できるものと思われ、柱痕跡の直径もほぼ30cm平均となる。なお建物軸方位は磁北に対して約1°6'西にふれている。



第1図 郡辺の遺跡分布図  
国土地理院 1:25,000「金石」「兼崎」「松任」「金沢」分級

1289 寺光寺染色团地道路	1410 墓師堂遺跡	1506~08 畠田C道路	1526~27 断量寺道路
1290~91	1411 畠江A道路	1509~13 畠田道路	1528 無量寺B道路
寺光寺発造場道路	1412~14 畠江B道路	1514~15 畠田大徳川道路	1529~31 黑量寺金沢港道路
1298 北塙B道路	1415 畠江C道路	1516 畠田御台場跡	1536~37 戸水B道路
1309 示野中桜田道路	1416 二口クロチヨウA道路	1517 菩正寺道路	1538 南新保A道路
1310 松村高見道路	1417 二口クロチヨウB道路	1518~19 菩正寺高畠道路	1539 南新保B道路
1311 松村とがまえ道路	1418 二口シス道路	1520~21	1540 南新保C道路
1312~14 松村A道路	1419~20 西念ヶ木道路	菩正寺番屋砂丘道路	1541 南新保D道路
1315~17 松村B道路	1494~96 寺中B道路	1522 寺中御台場跡	1542 西念ヶ木道路
1318~19 松村西の城道路	1497~98 寺中道路	1523 金石本町道路	1543~45 近岡道路
1320 松村平田道路	1499~1500 寺中歎田道路	1524 桂道路	1712~13 向来崎道路
1321 松村寺の前道路	1501~02 畠田無量寺道路	1525~35 戸水道路	1714 大根布壹跡
1409 出雲じいさま道路	1503~05 畠田B道路	戸水C道路	1715~18 大根布砂丘道路



第2図 主要遺構配置図

### B) 02 建 物

桁行4間以上、梁行2間以上の南北棟建物である。西側柱列北第4、5柱穴には楚板、西第2側柱列北第1柱穴には柱疵（径28cm）、西第2側柱列北第4柱穴には楚板がそれぞれ遺存していた。楚板はおおむね長30×巾15cm×厚3cmのものを使用している。柱疵、楚板位置から推定できる柱間寸法は桁行は227.27cm(7.5尺)の等間、梁行は西側柱列より300cm(10尺)、270cm(9尺)程度の規模となる。詳細については次年度以降の調査結果をみて訂正したい。なお據付掘方は不整形であるが、おおむね70cm×80cmの方形に近いものであったであろう。この建物も01建物と同様に柱筋にすべて柱のたつ純柱の倉庫様建物となる可能性が極めて強い。建物軸方位は磁北に対して3°5'西にふれている。

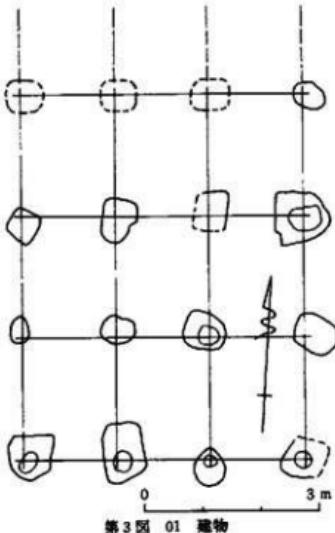
### C) 04 建物

桁行4間、梁行2間の南北棟建物であろう。西側柱列北第2柱穴に柱痕が遺存する他は、検出した各柱穴にはそれぞれ楚板が遺存していた。柱痕は、長径40cm、短径28cmが現存するが、径40cmを越す円柱であったと推定される。なお、底面よりややあがった位置に径10cmの、いかだ穴がある。据付掘方は約120cmの方形をなすと推定される。他のそれはやや小さく約100cm×90cmのはば長方形に近いものである。楚板はおおむね15cm×40cm厚さ約5cmのものである。柱穴内に1枚だけのもの2~4枚遺存するものがある。東側柱列南第1柱穴の楚板は、柄穴がみられ廃材を転用したものと思われる。各々の柱間寸法を復元すると240(8尺)cm等間になる。棟軸は北に対して約束に1°6'ふれている。

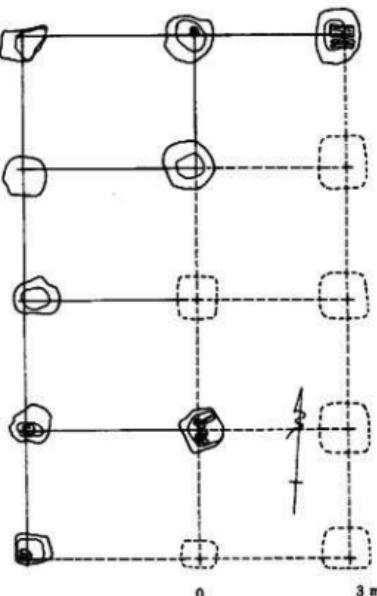
本建物は今年度までに検出されたものの中では据付掘方等からみても規模も大きく、非常に規則的な住居用の建物である。

### D) 05 建物

東西棟建物で身舎は1間×2間で四面に付属施設が付くものである。身舎の据付掘方ははば長円形に近く約長径60cm、短径50cmを測り、柱痕跡は径20cmを測るものが多い。四面に付属する施設の掘方は20cm×20cmの方形を規制とし、柱痕跡の直径は約10cmのものが多く非常に小さい。この付属施設については類例もなく不明であるが、縁に類する施設かと考えている。柱間寸法を柱痕跡の位置より復



第3図 01 建物

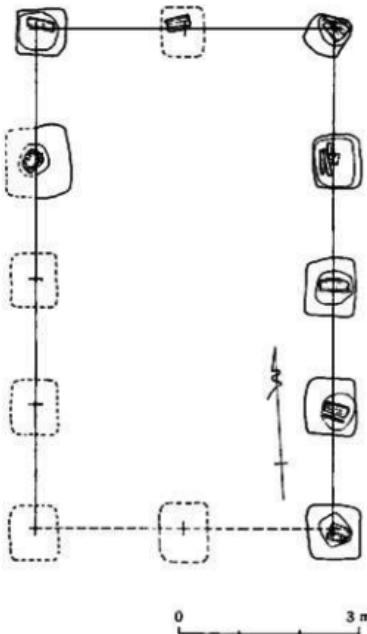


第4図 02 建物

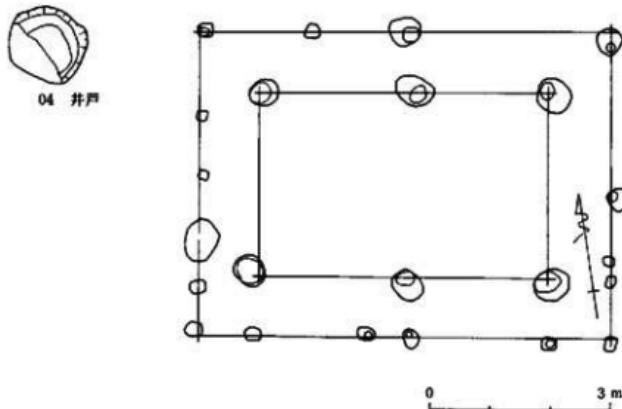
元すると、身舎の南北側柱列は各々 240 cm (8 尺) の等間で、東西側柱列は各々 300 cm (10 尺) となる。又、比較的よく遺存する付属施設の南側柱列西方 1 柱よりの復元柱間寸法は 100 cm × 230 cm × 70 cm × 190 cm × 100 cm となり、規格性にとぼしいものとなる。なお建物軸方位は磁北に対して東に約 8° 傾れている。

以上が今年度までに検出した掘立柱建物の概要であるが、現時点ではこれら建物の建立時期、先後関係等についてはほとんど不明である。と言うのも、柱穴検出面の包含層の時期を決めかねると同時に柱穴内から検出される遺物も細片が少數であるなど複合遺跡の難点等からである。今では、平安時代以降とおおまかに把えている現状である。井戸跡内からの出土遺物等から井戸跡と建物の関係を推しながら今後検討を加えたい。又、05 建物を除くすべての建物は

全柱穴には楚板を用いたと推定される。本遺跡の所在する環境は海拔 0.6 m、大野川に面する低湿地を考え合せると



第 5 図 04 建物



第 5 図 04 井戸

当然の事と言える。が05建物のみは、全柱穴に1ヶ所も遺存するものがなく頭初より掘立柱のみの可能性が大である。本建物は構造のうえからも他のそれらとは明らかに相違し、時期的な面からも後出的な要素をもっているものと考えている。集落遺跡の広がりからみると極少な面積であり今後の調査において検討を加えていくこととしたい。

## 2 遺 物

本書には時間的都合その他により実測図等の掲載はできなかつたが、昭和50年度（第1次）の調査と同様に各時代に亘る多大の資料の検出をみた。複合遺跡のため各時代の包含層も単純な形では存在せず、今年度分の地点では遺物においては細片が多かった。以下に出土遺物の概要を記すこととする。先ず土器類では周辺一帯に検出したが、古墳時代前時の溝跡（図版8）より出土した土師器一括があげられる。古墳時代全般にわたっては前期の遺物を除けば必ずしも多いとは言えない。奈良・平安時代の須恵器、土師器は大多数をしめるのであるが、時期を鑑別できるような資料は少ない。又造構につくものも少ない。綠釉・灰釉陶もかなりの量があるが、器形を復元できるものは少ない。第1次の調査でも一点出土（胴底部）しているのであるが、綠釉唾壺の坏部の破片が1点出土している。武藏国分寺跡、調布市杉森遺跡、下総国分尼寺近傍集落跡、平城宮跡（2点以上）、伊勢斎王宮跡等からの出土が報せられ近年の調査で増えつつあるが決して多いとは言えない。中世の遺物は断片的に出土している。珠洲、越前、瀬戸等があるが量はさほど多くはなく、時期も古いもの（13世紀）はない。青磁、白磁も破片ばかりであるが、40～50点出土している。大溝跡（図版9）から青磁碗底部2点が出土しているが、おおよそ14世紀代のものである。他の地点のものもほぼ同時期と考えられる。又、所属年代を決めかねるが土種の量が非常に多い。一方、石製品では石軒2点、紡錘車1点がある。木製品では箸状木器（図版9：中世大溝跡）がある。金属製品では宋錢（熙寧元宝か）1点、他に鏡片が若干ある。

## III おわりに

本年度の調査の概略を掘立柱建物を中心に記してきたのであるが、次年度以降の調査結果、正式報告書により今後に残された臨海集落の問題点は解決してゆきたい。



遺跡周辺の航空写真





調査区北側部分全景（東より）



調査区北側部分全景（南より）



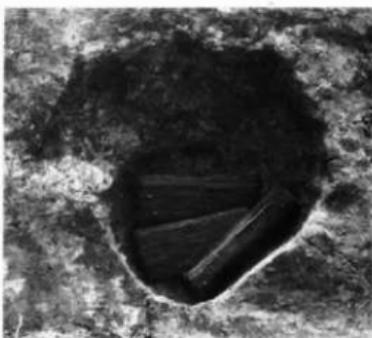
04 建物



04建物西侧柱列北第2柱穴柱底



西側柱列北第1柱穴楚板



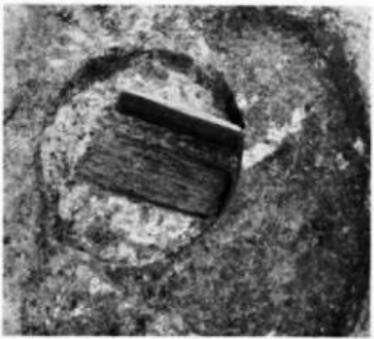
東側柱列北第1柱穴楚板



東側柱列北第2柱穴楚板



東側柱列北第3柱穴楚板



東側柱列北第4柱穴楚板



東側柱列北第5柱穴楚板



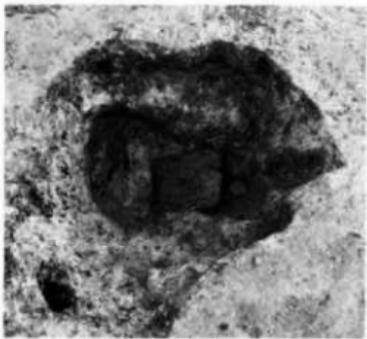
05 建 物 (北より)



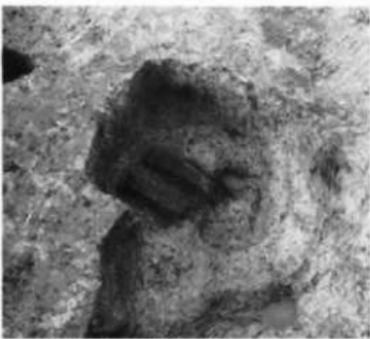
05 建 物 (東より)



02 建物(東より)



02建物東側柱列北第4柱穴楚板



02建物東側柱列北第5柱穴楚板



調查區北側部分古墳時代前期溝跡



同上 土師器出土狀態



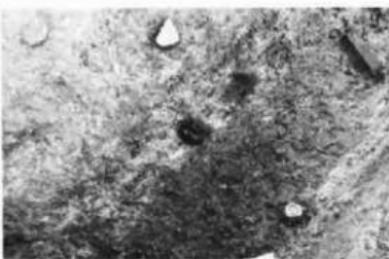
同上 土師器出土狀態



中世大溝跡（東より）



中世大溝跡青磁出土状態



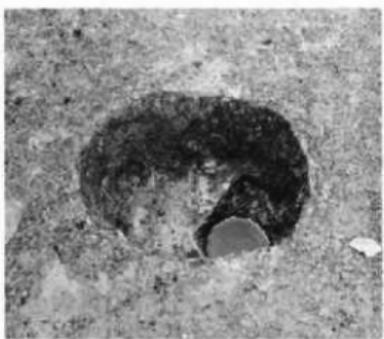
中世大溝跡箸状木器出土状態



04 井 戸



方形壓穴状遺構



05建物据付掘方



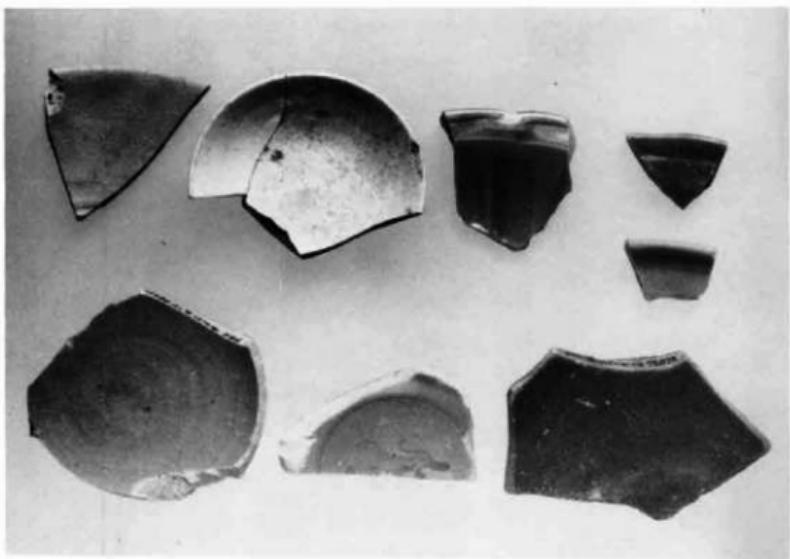
05建物据付掘方



05建物柱穴と層序



平均的層序



板載青白磁（上：表、下：裏）

**金沢市戸水C遺跡発掘調査概報**

**金沢港泊地造成事業関係**

**埋蔵文化財発掘調査概要報告書**

印 刷 昭和54年3月25日

発 行 昭和54年3月31日

編 集 石川県教育委員会文化財保護課

発 行 者 石川県教育委員会

印 刷 所 中川大正印刷㈱